IS 《インフィニットストラトス》 outerstory

召霊使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス
IS outer story

【Nコード】

N1472N

【作者名】

召霊使い

【あらすじ】

インフィニットストラトス
ISの登場で女尊社会が生まれたそう遠くはない未来。

空想兵器は、ISとして蘇り、白騎士と呼ばれたISとももに戦場を駆ける。

勝手にアニメ化記念作品。イメージ崩壊の危険性アリです。

プロローグ

そう遠くない未来、日本は世界の注目を浴びることになった。

インフィニットストラトス

ISの開発の成功。

パワードスーツ

宇宙服に変わる駆動服は志半ばで、宇宙服の代わりにならず、持て余した性能は何時しか軍事転用された。

それが軍専用ISである。

並ぶように軍事だけでなく競技にも導入され、世界大会も設けられた。

しかし、どう言うわけかISは女性にしか使えないと言う欠点を抱えていた。

IS登場から十年弱、日本は世界規模の混乱を招いた責を負いIS操縦者育成機関としてIS学園を設立。

毎年、世界の代表候補生、新型ISの稼働データ、ISの分析結果を世界に提示してきた。

今年、また世界は震撼した。

男児初のISパイロット・織斑一夏が現れたこと。

研究の進んでいた、仮想モデルISの実用化とそのパイロットの発表。

IS学園が再び注目され、もう一つの物語が始まった。

実戦と訓練は紙一重（前書き）

今作はコードギアスとのコラボであり、気分を害される恐れがあります。

実戦と訓練は紙一重

「篠ノ之博士、アルビオン正常起動。何時でもいけます。」

白衣の男が、博士と言うには不釣り合いなウサミミを付けた女性に報告する。

「それじゃ、不動一光……言いくいなあ。カズ君！乗るんだよ」

装甲を開き、主を待つ初実用化に至ったモデルのISは、女性、篠ノ之束が肩を押す少年を待っていた。

「本当に動くんですか？」

何処にでも居そうな少年、不動一光はロボットアニメに憧れて専門校に通っていた。

世界に女尊社会が根付いた今日まで機械オタクだとかバカにされたが耐えた。

「勿論だよ！束さんが作る物は何でも完璧で十全。それに《ランスロット・アルビオン》はカズ君専用機なんだから、実験の意味も兼ねて」

最後に元も子もない、しかし確かに、ISのコアを作ることを拒んでいた束が作る気になった物だ。

そもそもコンセプトは『男性にも使えるIS』であった仮想モデルは、独自に学び、使用者に合わせると言うISの構造の応用で生まれたシステムが取り入れられている。

量産された暁には、軍に、競技に男児活躍の場が戻ることだろう。『それでは、最終トライアルの模擬戦です。不動君、準備はよいです。すね？』

訓練アリーナに現れた現役軍師の女性二人はIS《打鉄》を纏っている。

純粹の日本産IS、安定した性能を誇る防御型は広く企業、IS学園でも訓練機として扱われている。

量産機でも熟練者に渡ればそこいらのパイロットには負けることがない優秀な機体と一光は記憶している。

「ハイパーセンサーはちゃんと稼働してるね？気分が悪かったりしない？」

束と並んだ女性は、黒い髪を腰まで伸ばして鋭い目つきで束を睨む。

不動キリエ、現在進行形で日本自衛軍IS部隊のエースで不動一光の唯一の肉親と言っても血の繋がりはないが、一光を溺愛している。

姉のような存在のキリエは、一光にISが渡るとは思わずに愕然とし、束に理不尽な怒りを覚えていた。

両親に先立たれたキリエは記憶を失い、行く宛のない一光と出会ったのは病院だった。

キリエは何度か病院を訪れては見舞いをした。

キリエは、一光に絶望した自分の姿を重ねていたのだと笑いながら最近語った。

「そう睨まないでよん！キリエンはどうしてムキになるのかな！？」

キリエと束、そしてかつての日本代表・織斑千冬は親友でISの開発成功と同時にキリエと千冬はISを手にした。

IS《紅月》とIS《白騎士》、第一世代ISの最高傑作の二機は既存ISの発展に貢献した。

「それは……わざわざカズが命を危険に晒す事ないし」

キリエは歯切れ悪く答える。

『ソレを言うならキリ姉もだ。そんなんだから彼氏も出来ないんだよ。』

スピーカーから一光が一喝する。

ピットルームで観戦していた二人はモニターを見て驚いた。

「嘘っ！貴方何処でそんな・・・」

キリエが驚くのも無理はない、一光の相手をしているのはキリエの部隊で屈指の実力者達だ。

いくら新型と旧型、スペック差があろうと経験の差は埋まらない。

手甲アンカー・スラッシュハーケンを放ち、鏃が一人の盾を捕らえ、力任せに振り回す。

「カズ君のシュミレーター適正はSランク、これまで類を見ないね。あれは才能だよ」

東がうんうんと頷く、《ランスロット・アルビオン》と一光の相性も良いようだ。

模擬戦開始直後、《ランスロット・アルビオン》の武装は二連装可変弾頭ライフル・ヴァリスとIS用近接ブレードしかなかった。

素手よりマシンかと双方を展開、装備する。

ヴァリスと名称されている試作ライフルは銃身を三段階に分けて威力調節が出来る。

三段階まで引き出すとスナイパーライフル（銃身が短め）程の長

さとなり、両手を添えられる。

適正化完了、フィッテングを開始します。

センサーを通して、《ランスロット・アルビオン》の状況が知らされる。

けれど、《打鉄》を纏った士官達が待ってくれたのはここまでだった。

警告！敵IS戦闘態勢、武装ロック解除を確認。

意識を向けるとすでに眼前まで迫った刃があった。

「おわっ！」

被弾、シールドエネルギー数値：221、危険域、損傷皆無。

とっさに籠手で防ぐと一撃で危険域になる。

舌打ち一つ、すぐにランドスピナーを展開。

従来のISは宇宙空間での活動を想定されていた為推進システムに地上と言う選択肢はない。

「アニメーション けれど、仮想モデルは違う。
両足側面に装備された推進ローラー『ランドスピナー』によって
地表を高速で移動できる上、加速して勢いを殺さずに回し蹴りを放
つとグライNDERの様に火花を散らし、衝撃と共に装甲を抉ること
が出来る。」

一人がふらつき、近接ブレードが揺れる。

「取った！」

ヴァリスのトリガーを引く、士官が頭に銃弾を受けてもんどり打
った。

ISには絶対防御と言うパイロット保護システムがある。

多大なエネルギーと引き替えになるが大抵は防ぎきつてくれる。
競技では狙えば確かに勝利はもぎ取れるだろうが、実戦ではシー
ルドエネルギーなど余り意味を為さない。都合の良い盾程度だろう。

『カズ君、シールドエネルギーは一撃で何処まで減った？』

東が通信してきた。

「いまいち返し方は解らないので叫ぶ。」

「危険域っ！！」

『やっぱりかあ、カズ君。《ランスロット・アルビオン》の唯一無二の弱点は“打たれ弱い事”！既存ISの三分の一しかシールドエネルギーがないから当然だけど』

は？

東は「やっぱりか」みたいな口調だが、一光は耳を疑いたい。

てか、幻聴であつてほしい！

「何で三分の一！？」

『稼働時間を可能な限り引き延ばした結果だよ。その代わりに、ほら。フィッティングが終われば既存ISでは追いつけない最速機体だよ。！』

東は今度、スピーカーを通して叫んだ。

一光が纏っていた《ランスロット・アルビオン》から工業的な凹凸が消え、流線を描いた白い装甲に蒼いラインが走り、籠手・装甲ブーツ共に仮想設定通り。

違っるのは胴体と顔だけだ。

背に突きだした僅かな装甲に2対のエナジーウイング展開用骨組があり、それは折り畳まれ邪魔には成らない。

掴んでいた近接ブレードは専用ブレード・レーザーヴァイブレーションソード（以後MVS）が握られている。

フィッティングが完了しました。確認ボタンを押して下さい。

一光はハイパーセンサーが表したウインドのボタンに意識を向けて閉じ、反撃に出た。

「左右から隙を突いた挟撃・・・」

ISのハイパーセンサーを接続した今、視界は全周囲360度。けれど常人は全てを把握できやしない。

エナジーウイングが、パツ！と展開し、白い閃光となった一光は士官Aに回し蹴りを入れる。

「ぐっ・・・あ!？」

何が起きた？そう言いたげだが士官Bも目を疑う。
素人だと聞いていた、なのに！

「ごめんなさい、締めです！」

「ごっ！と機動を阻害され、衝撃に呻く。

士官Aと士官Bは仲良く、シールドエネルギーと近接ブレードを奪われ、閉会となった。

「へー、カズ君は凄いねえ。」

「あれは才能ではないわよ、もう・・・」

ビットでは束が感心し、キリエが誇っているのか、敗北した士官達に失念するのか、微妙であったが、一光を自慢の弟と誇ることにした。

「IS学園の編入手続きは？」

キリエが真剣な面持ちで男性士官に訊ねる。

「はっ！既に完了しております。我ら男の未来を担う青年ですから！」

男性士官は何を期待しているのだろうか？キリエは僅かに吐息を漏らす。

「そうですか・・・」

キリエは僅かに不安になる、IS学園に入れば三年は権力等に脅かされる恐れはない。

しかし、仮想モデルと例の専用機の子・・・今年は大変そうと親友を思う。

何せ、一光と織斑一夏、世界でたった一人だけISを動かせる男子なのだから。

転校先は女子だらけ!?

織斑一夏は“世界でISを動かせるたった二人の男子”の一人だ。

そして、今現在IS学園にたった一人だけの男子生徒。

「眠い……」

一夏は呟くと机に突っ伏した。

寝不足の原因は幼なじみと同じ部屋と言っこと。

少なからず年頃の男女が同じ部屋にいるのだ。気を使う名という方が無理な話であり、篠ノ之箒はムスツとしている。

一夏が特に何かしたわけではなく、箒は一夏の周りを取り囲むクラスメートが気に入らないのだ。

「織斑君、おはよー!」

「おっはよう!織斑」

「朝からダレてるねーおりむー」

それに対して一夏は「おはよう」と返すとまた突っ伏す。

それも面白くない箒、無用な気遣いで一夏が寝不足。

しかも久しぶりに再会したらダラけていたし剣の腕も鈍っていた。
昔に比べて軟弱になったのがさらに気に入くない。

「みんな！ビックニュース！ビックニュース！」

一人が声を上げて駆け込んでくる。

「何ですか？騒々しい」

セシリアがいつの間にか一夏の横から問う、さらに箒的に面白くない。

ちなみに、セシリア・オルコットはイギリス代表候補生で初心者の一夏に苦戦した。

「編入生が男子なんだよ！仮想モデルの……！」

クラスは騒然となる。

IS学園にも適正候補者の通知は届いていたが、学園側は出来るだけ優秀な生徒を適性試験シミュレートに参加させた。

一夏や箒達一年は論外扱いされ、セシリアはやっと忘れた怒りを蒸し返す。

しかしながらセシリアは既に中距離射撃型ISを専用機としていたため、対象にはならず、見ず知らずの男子と言っただけで話題になった。

「それ本当か!？」

突っ伏していた一夏も再起動、何せ一夏は一人園に投げ出された男子なのだ。

ホームルームが始まり、織斑千冬が姿を現すと静かになる教室。

「初めまして、不動一光です……」

恒例とも言える自己紹介、クラスはほぼ全員が女子。

当たり前だが女性しか使えない筈のISパイロットを育成する学園だ。女子しか居ないのも頷ける……居た、男子一名。

しかし、さることながら女子の視線は未だ期待している。

いったい何を期待しているのか？

いったい何なのか。

「不動君って専用機持ちって噂本当!？」

どことなく声が聞こえた。うん、何？

「それ気になるー!」

「仮想モデルの第一使用者でしょ!？」

教室中キヤツキヤツと煩くなつた。

何でか話題は《ランスロット・アルビオン》の事らしい。

うむ、助かる。

ヒュツ!と白い円筒状の何か、チヨークが騒いでいた数人に直撃、
一人男子が鞆を盾にしている。

「騒ぐな小娘ども!」

担任である織斑千冬が手元のチヨークを投げたのだ。

一寸狂わない狙いとは恐れ入る技量だ、元日本代表は伊達ではな
いらしい。

「質問は休み時間にしろ!それに、不動が専用機持ちかどうかは直
ぐにはつきりする。」

「あの、境遇が同じ奴ってあの反応をした?」

刹那、今度は出席簿が飛んだ。

「何だ？」

「いえ、何でもありません」

どうやら不用意にふざけるのは死刑宣告らしい。気をつけよう。

「なんかかんやで昼休み、IS実技授業とは何をするのか、千冬の専用機持ちはビッドに行け」と言う指示が気になる。

ISスーツ、といっても一光と一夏はウェットスーツに近い。

一光の物は仮想モデルである《ランスロット・アルビオン》は別機体とISスーツは過度の負荷にも耐えられる特注品。

世界で一着の男性用だ。

「良いよなー、不動は」

「何を言っかつ！このハーレム堪能野郎が」

そう切り返すと一夏は「既に人のこと言えるか！？」と言い返してきた。

うむ、言えん。

「なんなら、《白式》の対衝撃機構をオフにしてバッテリーやがれ。《ランスロット・アルビオン》はそんならいGが掛かるのを緩和する意味も含めてセットなの！」

「そうなのか！？てつきり特注かと思った」

「直ぐ後悔しやがれ」

一夏と一光は速攻意気投合し、女子の質問責めを回避して今に至る・・・訳でもなく、多クラス合同実演、つまりは既存専用機持ち VSとか言うリンチ。

酷くね？転校生・編入性はモんでやるってか？

アンタらアマゾネスか！

今の聞いたらクラスだけでなく全校生徒を敵に回すな、一夏以外。

『何をしている！早く出て来い、腰抜け共！』

スピーカーから千冬の叱咤が聞こえた。

「おっと、先行くぜ！」

一夏が一足早くアリーナへ飛び立つ。

しかしだ、《ランスロット・アルビオン》は従来と違うからな。

カタパルト不要なんだけど。

「腰抜けは頂けないな、いくら元世界チャンプでもっ！」

一光も後に続く。

一組代表VS転入生

アリーナは広い、当然ではあるが既に待機していたセシリアは身丈ほどもある狙撃ライフル スターライトMk-? を飛び出してきた反応に構え直す。

「遅いですわ、一夏さん。」

内心では嬉しいセシリアだが、軽く叱咤する。

「悪い悪い、今回は頼りにするよ。セシリア」

「と、当然ですわ！この私、セシリア・オルコットが勝利を手にして見せますわ！！」

高らかに宣言するセシリア、一夏は苦笑していた。

何分、専用機を手にしてから間もないのだ。

いくらか、実戦紛いな事もしてのけたとは言えセシリアの存在は頼もしい。

反応感知、敵機IS《白式》戦闘態勢、ブルーティアイズIS戦闘態勢。

ハイパーセンサーを通して相手、仮にも同クラスの二名が居ることを《ランスロット・アルビオン》が知らせてくれた。

アリーナに飛び出るとランドスピナーを展開、従来とは違ってアリーナに着地するとスリップした様な音を奏でて立ち止まる。

警告！ロックオンされました。

間髪入れずに狙いを付けるとは、やはり代表候補生・・・やるものだな。

「あら、不動さんは飛べませんか？」

セシリアが安い挑発をかましてきた。

「違う、見せてるのさ。既存と仮想の違いを」

余裕を持って返す。
既存との違い、それは地を走るか否かと言うこと。

ISは宇宙空間での活動を前提にしているから浮遊していて当たり前だ。

そのため、身長よりもデカい火器を扱うのは珍しくない。

セシリアが良い例だ、しかし仮想モデルはアニメーション仮想の設定を継ぐように創られる。

汎用性に富んだ機体ならそれ相応の特徴がISアーマーに現れてしまう。

「しかし、何故観客席はいつぱいなのか」

囁かな疑問、それが解決することはない。

《ランスロット・アルビオン》は仮想陸戦汎用兵器、飛行能力を上げて空戦能力を底上げたモデルで元々宇宙対応ではない。

空気抵抗を計算してかシャープなラインを描くISアーマーは、中世騎士を思わせる。

「武装はまだ未完成だね、コレくらいしかないんだ」

光の奔流がはせてMVSが中から姿を現す、一夏はまじまじと見

る。

何故、あんなに自信に満ちているのか？

「中距離型に近接ブレード？笑止ですわ！」

セシリアがトリガーを引く、同時に一光が回避行動に移る。

正確な射撃が数秒前にいた場所を撃ち抜いた。

「成る程、言うだけはある。」

「おおおっ！」

回避した先には一夏がいた。

近接ブレード“雪片二型”を振りかぶっている。

「成る程、一夏は近接オンリーか？」

MVSを二本交差させて防ぐ、こんな時でも分析は欠かせない。

何せ武装の知れ渡った量産機ではなく専用機相手なのだ。

回避に徹するにも限界がある、MVSが、左の一刀が弾け飛ぶ。

「くっ!?!」

対戦者を侮った、先ほどビットで他愛ない話をした友人になつたばかりの男子は剣の道にも通じているようだ。

試作だからと四の五の言っている余裕はないと一光は弾け飛んだMVSを格納する。

腰辺りに手を回し、左手に試作専用ライフルを取ると一夏に向けた。

「私をお忘れでなくてっ!」

放つ前、背後に違和感を感じる。

二人が相手だがセシリアは空にいる、ならば?

「ハーケンツ!」

初法的な武装起動で振り返り様にアンカーを放ち、何かに撃ち込む。

観客席からどっと歓声が沸き上がる。

既存ISと仮想ISの模擬戦は教員達にとっては単なるデモンストラーションでしかない。とは言え、始めてみるから真剣その物だが。

ビットは計四基、内一機は潰した。

しかしながらセシリアのダメージは小破程度で、一夏に至ってはダメージらしいダメージを与えていない。

仕方ない、と一光はため息を吐くと盛大にジャンプした。

「バカにしますの？その程度・・・！？」

とセシリアが狙撃銃 スターライトMk-? を構えるより速く、ズルツ！と銃身が落ちて小さな爆発を起こす。

「セシリア！」

「いやー、流石だな一夏。他人の心配か？」

後ろから声がした。

一夏が振り向くと同時にMVSの一刀が首めがけて振り抜かれた。

「うわっ！」

驚きながら一夏は瞬間加速イグニッションブーストを起動、間合いを取るつもりだった。

警告、背後より敵機接近！

白式の警告に一夏が振り向く、雪片を構える暇もなく顔を深く抉られた。

ランドスピナーが直撃し、『絶対防御』機能が発動する。

ザックリと白式のシールドエネルギーが削られ、一夏は一気に距離を置いた。

「近接型は、悪戯に間合いを開くものじゃない。ましてや射撃武装が無い《白式》なら尚更な！」

連蹴りがサンドバックに打ち込むように受ける一夏、しかし、アリーナに居た生徒達は疑問の声を上げる。

何が起きたのか解らない、目が追いついていないのだ。

ISのハイパーセンサーがあつて始めて補足できる速度で、単一能力『高速戦闘』で元々高機動型の《ランスロット・アルビオン》はより速くなる。

それに曲がる際は曲線を描かずに直角だ、一夏に追いつけたのもその為。

言うまでもなく多大なGが発生し、一光を襲うわけだがそこは特注ISスーツと《ランスロット・アルビオン》の対反重力機構とやらがしっかり相殺している。

「くっ！が……！？」

見るに《白式》は限界だろう、シールドエネルギーも次で底をつくに違いない。

「さてまあ、一夏はセオリーを学べよ。ってそれは俺も同じか」

素早くMVSを首に振り抜き、一夏を撃破する。

好きを見たセシリアがミサイルを放つが意味がない。

「ビームがレーザーにすべきだったな。代表候補生」

左から始まり、最後にMVSがセシリアの両肩を貫いてエンド、
やはりダメだな。

フルスペックを使うと性能差がありすぎる。

寮は天国か地獄か

授業が一通り終わるとまた身動きが取れなくなった。

「ねえねえ！不動君つてもしかして滅茶滅茶強い？」

「セシリアは強かった！？」

「寮の部屋決まったの！？」

ハッ！とした、完全寮制であるIS学園で男子は一夏と一光だけ。

つまり、ルームメイトも一夏とばかり思っていたが。

「おーい、最後関係なくないか？てか幾ら男子二人だけだろうと女子と相部屋なんて無いだろ。」

近々、学年別トーナメントがあるらしく放課後にアリーナが開放されている。

一光もまた、トレーニングを積みに来たところで昼間の結果に納得のいかないセシリア・オルコットに捕まった。

専用機持ち以外は訓練機の貸し出しも行っている辺り、盛大な催しになるんだろう。

さて、話を戻せばセシリアをあしらうようにまた撃破すると人盛りが出来ていたと言う寸法で、トーナメントはタッグマッチらしい。

まあ、今から相方を見つけておくのも良いかも知れない。

ここにいるのは未だ決まらない寮室の都合で待ち状態の暇潰しである。

「ねえ、不動君！バトルについて教えて！！」

と一人が口走る、と言うか既存機だよね？君らの。

「ずるーい！不動君、アタシもー！」

「トーナメントで組む相手決まったの？良ければアタシ組んで上げても」

から始まり、すでに混乱状態だ。

「あー、分かった分かった！呼び出しが掛かるまで良ければな」

すると後悔した、後悔せずには居られない。

何より女子達の目が輝いている、いや、これは草食から肉食にシ

フトしたんだろう。

密かに《ランスロット・アルビオン》を部分展開し、ランドスピーナーを展開。

「何を騒いでいる小娘共！！不動を開放しろ！」

千冬が一括すると女子は静かに、道をあける。

何だ？レディースのボスかあの人は？

「ぐぐぶつ！？」

逃げようと加速した一光は壁に突っ込むという結果に終わったわけだが。

「おー、不動の奴人気だな」

傍目で、箒とセシリア、セカンド幼なじみこと凰鈴音に特訓を付けて貰っているが一向に上達しない一夏は濁流とかした生徒を受け止める一光にかつての自分を重ねて遠い目をしていた。

「くっ！認めざる終えませんわ、不動さん……お強くて」

「それはあっさり懐に飛び込まれるアンタが弱いんですよ」

「何ですって？鈴さんこそ、一度手合わせしてみても如何かしら？」

「いいわ！あんな奴ボロボロにしてやるから」

「逆ではなくて？」

「何よ！？」

「ふんっ！」

と言い合いが始まり、一夏はソレを眺めているだけだった。

一夏的にも羨ましい、あれだけ強ければと憧れてしまう。

廊下を歩きながら一光は寮の規則について説明を受けて、部屋に案内された。

ネームプレートには何も記載はなく、一光が危惧していた気の使う毎日は回避されたようだ。

「不動君、ここが貴方の部屋です。」

山田先生が開いて見せた部屋には、ドアから真っ直ぐの廊下とベツドエリア、所謂寢室に位置する部分に山積みとなっていた。

「はあ、まさかとは思いますが……後ろの野次馬が乗り込んでくるなんてありませんよね？」

山田先生は「多分」とだけ言う。おいおい。

本来二人一組で一室を使うようで学年事に当然ながら区画分けされている。

そんなの無視で野次馬している二年三年も居るようだがスルーしよう

うそつしよつ。

「それと連絡事項です、《ランスロット・アルビオン》の競技用装備が数日中に届きます。」

「速くないですか？」

「授業結果から即実装が決定したようです。コレがないとスペックだけなら不動君が最強ですから」

さらりと言つてのける山田先生。

「了解。」

「それとお風呂は部屋のシャワーをお願いします。」

「ま、当然ですね」

細かな説明を受けて、やっと荷解きに取りかかったのは二時間後のことだった。

食堂で一夏達と出くわすと一夏は両手に花だった。

「よお、一光じゃん。」

「よお、一夏。何だその幸せ街道まっしぐらの光景は」

一夏は右にセシリア、左に箒と見事に両手を埋めている。

「いやあ、くつつかれて歩き辛いんだよ。痛っ！」

刹那、両サイドからセシリアと箒が一夏の足を踏んだ。しかも踵で、あれは痛そうだ。

「幸福を理解できないとは犬にも劣りますわね」

「まっただ！」

そんな三人を眺めつつ、一光はトレーを受け取る。因みにメニューはカレーとコーンサラダ、以外と美味そうだ。

「そついや、一光に聞きたいことあったんだよ」

「何さね？」

「どうすればお前みたいに強くなれるんだ？」

セシリアと篝以外数人を交え、テーブルを確保して話しながら夕食を取る事になった。

一様、《白式》も既存機だよな？なら意味ないような気もするが。

「俺の場合、イメージを確立させた上でアニメーション通りの動きを再現するんだ。例えるなら八極拳だ、ゆっくりと軀に動きを刷り込む。」

「不動さんもISを手にして間もないと聞きましたけれど？」

セシリアの言うとおりだ、てかどっから回ったの？その情報。

「完成前にイヤって程シュミレートを繰り返したから、それで即実戦で確立させた。一夏みたいに白紙からスタートした分けじゃないから参考にならんぞ？」

適当にあしらって食事に戻る、セシリアは既に射撃型としてバトルスタイルを確立させているし、一夏も剣だけなら一光が負ける。

箒は分らん、少なくとも一夏よりは強いだろう。

「それでも見て欲しいなあ」

「アタシも！」

とまた騒がしくなる、名前は把握できていないがクラスの連中だ。

「何なら演習の時にでも相手になるよ」

と上手く流したつもりが、一人は違った。

ジッと睨む少女に気付いた一夏が声をかける。

「何やってんだよ、鈴。席なら空いてるぞ？」

「ふーん、アンタ。アリーナでもそうだったけど何でそんな警戒すんのよ？」

「どうやら一光のことを言っているようだ、確かに警戒と言っより緊張は解けていない。」

「単に緊張してんのぞ」

「そう？なら私と戦いなさい」

「何故？」

「セシリアを負かしたんでしょ？」

「脈絡がないなあおい！」

流石にツッコミは早い、なんか最近こんなのはつかだな。

戦え戦えって、アレですか？戦闘民族ですか！？

「ちょっと待てよ、鈴。流石にいきなりはないだろ？」

一夏が宥める、どうやら一夏は事の経緯を知っているようである。

（これ以上からまれてもアレだな、逃げよう。）

一夏と口論を始めた鈴を後目に一光は食堂を後にした。

食堂を出たところで視界が暗くなる、何だ？

「だーれだ？」

からかうような間延びした声、全く聞き覚えありません。

一光はため息の後即答する。

「知りません、悪戯ならやめて下さい。」

「えー？つれない返事だなあ。えい！」

振り向き様に何か突き出され、体勢を崩して回避……、

「うおっ！」

失敗、突き出されたのは畳んだ扇子で、突き出した本人は満面の笑み。

「何のマネですか？」

扇子を握り、一光は怒りを堪えて笑顔を向ける。

「宣戦布告かな、キミは未だどの部活にするか決めてないよね？」

IS学園では生徒の部活所属が校則で決まっている。

つまり、帰宅部は許されないのだ。

一光の場合、仮想ISのデータ提供、自衛隊から要請のあった新型装備のテスト、やることが山積みで部活どころではないのだけね。

「そうですね、決めかねてますって今関係ありますか!？」

「うん、ある。不動君は生徒会予約だもの。」

そう言うなり扇子持ちガールは去っていく。

ま、一夏のように常にハーレムは鬱陶しいから良いくらいだが。

結論から言おう、野次馬は何時になっても散ることがなかった。

(何時まで居る気だガールズ!?)

何?何なの!?!この化学変化は!!

「ちよつと!」「やら「押すな」と聞こえる辺り、廊下はギチギチく
らいか。

注目するのは一夏だけにしてほしいなあ、これじゃあ寝られんよ。

「ん?気配が消えた.....」

時間は午前零時ジャスト、寮長が見回りの時間だ。

何でこんな事を知っているか？

スルーしてくれ。

「おいおい、何で室内にいるんだお前は!？」

ドアにへばりつくように一人の生徒が背を預けてため息を吐いた。

「わっ!ゴメン、匿って!！」

「はい!？」

咄嗟に聞き返す。

今、匿うとか言った？

匿うとは何か?てか何を匿えと!？

「取り合えず自己紹介ね、私は粕谷詩織って言うの。よろしく」

なんってマイペースな子だ!と言うのが一光の感想だった、目の前にいる少女はラフなジャージ姿ではある。

特別何かに追われている分けではないだろう、ならば何故匿えなんて表現したのか？

「えー……っと聞いていいか？」

「え？」

「何から匿えと？」

「わっ！そんな事言っただ！？」

ええ、言いましたよ。

「うん、てか帰ろうね。」

「そうだね、うん。そうするよあははは……」

そう言っただけで粕谷詩織は去って行った。

何だったのか？さっぱりだ。

翌日、一光はフラフラで授業どころではなかった。

粕谷詩織の侵入が目覚ましとなり、最高潮を迎えていた眠気はか

き消された。

寝れないからと《ランスロット・アルビオン》のエネルギー配分の調整をして、競技用装備とやらがどんなものか考えていたら、朝日が見えたのだ。

「眠い・・・」

眩くなり突っ伏す。

「あー、一光。寝る暇ねえよ」

一夏である。

あの模擬戦以降、ちまちまと会ってはハーレムっぷりを見せられて少し苛つく。

「何故だ！？さては一夏、お前まで俺の安眠を妨げるか！！」

ガバア！と顔を上げるとそこには鈴がいる、そして勝ち誇っている様な顔だ。

「あらあー、仮にも話題のアンタがその様？早く行かないと千冬さんに殴られるわよ？」

「お前もな！既にISスーツは着ているのだよっ」

「あら、偶然ですわね。」

背後からセシリアが微笑む、一夏は率直に恐いと感じた。

「今日は合同実技、リベンジの機会にはもってこいですわ！」

負けたのがそんな悔しかったんですか？

「その前に私と一戦やるわよ！」

したかねえよやりたくない、これ以上体力使いたくない。

「そろそろ不味いぜ一光！」

一夏が某蛇さんよろしく一光を引きずって口論の場を離脱、ローカ
ーで最速の着替えをこなしてアリーナ。

「遅いぞ、男子共！」

有り難き出席簿アタックではなく、IS近接ブレードが叩き込まれた。

「死ぬ！死にますからねマジで!？」

間一髪、IS部分展開で両手をIS化し受け止めて抗議する一光、その陰で難を逃れる一夏。

「安心しろ、ここは大学病院並の設備だ」

「鬼がいるんですが!？」

「はいはい、不動君には追加装備をインストールして貰います。その後授業に参加して下さい」

山田女史に諭され、制御装備を量子格納インストールに向かう。

「うげっ!これは……」

カタログスペックを見た瞬間、既存機にスペック合わせる？嘘じやね。

「おおー、翼が付いた。」

一目見た一夏がそう言った。

スペックダウン装備“エアキャバルリー”、フライトユニットで幾つかオプションパーツがあるが今は製造中とのこと。
因みにカタログスペックは第二世代機並。

「煩い、コイツで本当に手腕が物を言うんだ。」

武装も制限され、ウィングショットが使えない。

これは一光にとって大打撃に近い、高速射撃が使えないのだ。

ヴァリスは対応していないため、狙いを絞るために減速する必要がある。

「準備が出来たようだな、凰！オルコット！」

千冬が、今にも襲いかからんとする鈴とリベンジに燃えるセシリ
アを呼び、男子対女子の模擬戦を提示。

勿論、一夏と一光に拒否権はない。

「一夏、とりあえず死ぬなよ」

「ああ、お互いにな」

結論から言えば、男子チームは敗北した。

鈴のIS《甲龍》の衝撃砲、あれは卑怯だ。

何せ弾丸が見えない、砲口から弾道を予測した上で避けてもセシリアに狙撃された。

あえて言おう、無理であると！

「ふふーん！ほれ、何か奢りなさいよ」

そんなこんなで今は食堂、鈴が自販機前で奢れと言っただ。

一光からすれば、馴れない装備の《ランスロット》で苦勞し、善戦した結果なのだから勝ち誇られると苛つくだけだ。

「うるせえ、覚えてろよー夏ラブめ・・・」

瞬間、鈴がアップパーカット。

「うっしょー!？」

「なっ何言うのよ！アンタ！！」

軽い脳震盪で反論所ではなかった。

何しがやる、コイツ！？

それを傍目で見っていた一夏は、

「鈴と一光、何気に気があってそうだな」

そんな事を呟いた。

寮は天国か地獄か（後書き）

粕谷詩織。実はこの娘、原作には出ていない居るであろう日本代表候補生です。

篝のストレートヘアを思い浮かべると分かり易いキャラクターメ
ジ。

侍少女と騎士

一光は現在ダウンしている、何故か？簡単だ。

「何で十回もやって勝てないのよ！」

どげしっ！と伸びた一光の脇腹を問答無用で蹴り上げる鈴。

屍モードの一光は勝利してすぐに外壁に衝突、デスった訳だ。

観戦していたクラスメイト達は警戒が解け始め、不動一光と言う人間はこうなのか、そう。

少し抜けていると解り始めている。

「あー！ムカつくっ」

憤慨する鈴、死から帰還した一光は首を傾げて、

「何で脇腹が痛いんだ？」

と呟いた。

「しかし、一光は凄いよなホント」

一夏はセシリアとダブル幼なじみに色々教わってはいるが上達しない。

ま、教え方がアレだが。

「そんな事ねえよ、一夏もよくあんな教え方されて前にすすめ!？」

刹那、一光の頭を狙ったレーザーを避けて、一太刀をシールド・ブレイズルミナスを展開し、防ぐ。

「チッ」

「殺す気か!？」

「これも最近のやり取りだ。」

校長室で、自衛隊IS部隊隊長こと不動キリエはある交渉を完了させた。

「一人だけ、専用機を与えるんですよ。自衛隊入りは内定しちやいますか」

そんな台詞から始まり、10分前後で、校長は折れたと言っわけだ。

トレーラーの助手席でキリエは推薦された生徒のデータを見る。

「粕谷詩織ちゃんねえ、丁度良いわ。担当教師は千冬かぁ……………」

そんな詩織はアリーナの隅で数人に囲まれていた。

「それじゃあ、《打鉄》の返却頼むわね」

一人の生徒が言う。

「待ってよ、私は使って……」

「はあ？何言ってるの、訓練機は班の代表、代表候補生様が使ってたんでしょが！」

訓練機の貸し出しは一班単位で行われているため、個人の申請は受け付けられない。

箒は一夏とセシリアの専用機持ち二人の班分けて、殆ど個人申請だが通っている。

単にこれは虐めだろう。

突っ張った女生徒と複数の生徒は二年、詩織以外は上級生というわけだ。

「そのこのグループ、下級生虐めは良くありませんなあ」

詩織は思わぬ声に顔を上げた。

そこには一光と一夏、箒にセシリア、鈴がいた。

「見てたぜ、ちょっと情けなくないっすか？先輩方」

一夏が言いながらズイツ！と前に出る。

しかし、今日の偏見女子はこの程度では引かない。

「煩いわね、アンタ達は黙ってなさい！」

「そーよ！」

「関係ないでしょ！」

黙っていた二人も加勢して一夏は若干たじろいでいた。

「いや、関係はある。粕谷詩織は知り合いだ、少なくとも見過ごせない」

きつぱりと一光は言い、展開していたISアーマーを準戦闘モードで待機させる。

何せ、上級生三人は《打鉄》を展開し、臨戦態勢で食ってかかっているからだ。

「なら、丁度良いじゃない！」

タイミングを見計らったように、キリエがアリーナに姿を現した。

「なっ!?!」

その場にいた生徒は啞然とした。

当然、その登場は一拍置いて狂言乱舞する乙女の嵐を巻き起こす。

「きゃー!」

「本物よ!」

「日本が誇るエース!」

「織斑千冬のライバルが何故ここに!?!」

ああ、騒がしい。

それが一光と一夏、箒以下の感想だった。

確かに、本来キリエはこんな所に居る人間ではない。

「まさか、カズの知り合いとは……何時の間に引っかけたの?」

しかも、周りフル無視で勘違いをしている。

「あのー、姉貴？そんなんじゃないし、アンタ仕事だろ！」

「んー人材発掘。量産機じゃ彼女の反応速度に追い付けないからねー」

ビシッ！と詩織を指さすキリエ、そして一光は鈴、セシリアから質問責めにあっていた。

「ちょっと！姉貴ってどういう事！？」

「そのまんまだ！噛みつくな鈴！！」

「ではでは、現日本代表の弟でしたの！？」

「そこ？驚くのそこ！？」

「貴様、さてはコネで専用機を！」

「訳解らん！」

「コネで専用機を手に入れられるなら、今日どれだけ専用機持ちが増えようか？」

「貴女達、この子をいじめんのは良いけど覚悟して相手してあげてね」

そう言つたりキリエは詩織をビットルームに連れて行く。

「ほら、カズも来る！」

ISを引つ込めた矢先に一光は首を掴まれた。

あの、苦しいんですけど・・・マジで。

「まったく、何をしてくれるんだ」

あきれた様子で、千冬はキリエに言った。

アリーナが騒がしく、キリエの来訪を知っていた千冬は仮想第一ランスロット作ISアルビオンに対応させるソフトウェアを搭載した《打鉄》のカスタムモデル、《暁》のテストパイロットの顔を見に来たのだが、よもやその場で選定して事もあろうかこれから上級生と模擬戦と言うシチュエーションである。

「大丈夫、詩織ちゃんも伊達に代表候補生してないわよ。それに騎士様イトのお手伝いがあるんだもの」

えーっとつまり、これは二人一組ですか？

キリエは、一光の言いたい事を即座に悟って親指を立てた。

なんとかして抜け出したい、何せエアキャバルリーに完全に慣れたわけではないし、模擬戦とはいえ破損する危険性もある。

繰り返す、《ランスロット》は打たれ弱い、打たれ弱いんですよ！？

しかし、やるからには負けられない。

「粕谷、《暁》はお前の機体だ。《打鉄》と違うのは根本的に《ランスロット・アルビオン》に追従する事の出来る改良モデルだ。不動がアシストするとは言え、気を抜くな。」

千冬のは一括すると詩織は無言で頷いた。本来帯刀状態では武器を展開できないIS、《暁》は既存機でありながら仮想モデルに近づけ過ぎた機体だ。

量産を視野に入れた準仮想モデル、《打鉄》との違いは肩部に浮遊する盾がなく、ISアーマーは幅・強度共に極度まで軽量化し、腰の左右にはリニアキャノンを内蔵し、太刀・大鷲と不知火、二振りの近接ブレードを保有する。

セシリアの《ブルーティアーズ》同様、スカートスラスタを備え、それと鞘・リニアキャノンが一体になっているので、射撃時は、刀を納めなければならぬわけだ。

「さて、敵さんは訓練機だろうが、成程・・・《ラファール・リヴ

アイブ』と『打鉄』か。」

カタパルトに乗って、一光はヴァリスを構え、発進体制に入る。

「先行くぞ、粕谷。『ランスロット・エアキャバルリー』、発進！」

急激に掛るGに耐え、訓練場^{アリーナ}に飛び出すとさっそく攻撃があつた。

武装貸出のマシガン、確かラピットファイアと言う銃器で連射性と操作性に優れ、扱いやすさに定評のアレだ。

「おいおい！構える前の相手に射撃って……セオリーに反するんじゃないの!？」

「ハンっ！性能差が否めねえんだよ、調子乗るなよ男子のくせに!」

おお、バトルになるところなるのか偏見女子。

「うるせえ、今は同レベルだつつつの!」

ヴァリスを放ち、すぐにランドスピナーを展開、逃げに転ずる。狙いを定めようにも『打鉄』の方が斬り込み、まともに狙えたものではない。くそっ!

少なくともファースト・シフト終了まで時間を稼がなければ!

「どうして、粕谷さんは出てきませんか？」

観戦席で、セシリアは疑問を口にした。

「いきなり打つのであってありかよ！？くそっ、粕谷が出ねえなら俺が行くぞ」

一夏が席を立つと後頭部に鈍い痛みが走る。

「今はピットに入るな馬鹿もの。」

「何だよ、織斑先生はあれでいいんですか！？」

一夏が反論してみる、千冬は溜息を一つ挟んで告げた。

「不動は、ファーストシフト終了まで出るなと告げたのだ。一夏、貴様は女子にも最適化しながら戦えと言うのか？それに不動はこの程度の相手に負けはしない」

千冬の言つとおり、戦場に変化はあった。

スラッシュハーケンで二機を捕らえた後、力任せに振り回す。ゴチ

ン！と目の前で振り子の要領で激突させ、一光はヴァリスを《ラフ
アール・リヴァイブ》側に連射し、撃墜を知らせるアラームが鳴り
響く。

「残ったのは……」

「先ほど粕谷を罵っていた奴だな」

鈴が目を凝らす、筈が呟いた。

よし、準備は整ったな。

「そんじゃ俺はこれで一間をもらっつよ」

観客は啞然とした。

「あ？何言つてやがる！？」

逆上して斬り掛る上級生を避けながら一光は言う。

「アンタの相手は、粕谷だ。忘れるなよ糞つたれ！」

そう言うところからともなくレールカノンが放たれ、《打鉄》を狙

撃した。

「お待たせしました。それでは！」

詩織は近接ブレードの一振り、不知火を鞘に収め、一刀、大鷲を居合抜きの構えで迫る。

「遅れてきた分際で！」

上級生が怒りの矛先を詩織に向ける。が、意味はない。

《打鉄》に装備された近接ブレードが振り抜かれる前に一閃。

「居合い斬り!？」

観戦席も、上級生も驚きのあまり後退しながら構え直す。

対する詩織は微笑んでいた、本来の彼女は居合いに長けている剣術スタイルで、全国剣道大会まで上り詰めた。

決勝で筈に負けはしたが日本代表候補生に選抜されて、今まで気の弱さから虐めを受けていたが、そのいじめっ子を撃退したのだ。

「行ける! 《暁》なら!」

その光景を間近で見た一光はプライベートチャンネルを開く。

相手は当然キリエだ。

『はい?何かしら』

「強過ぎね？粕谷の奴」

『あらま、代表候補生舐めたら死ぬよ？これからいろいろ支えて上げなさい。』

切られた。くそっ！

試合にもならない試合が終わる。

あー、専用機持ち増えたな。山田先生頑張れ。

アリーナの隅で頭を抱える山田先生を見つけ、密かにエールを送る。

悪魔の旋律

粕谷詩織が専用IS《暁》を入手してからと言う物、一光と一夏はいろんな意味で女子に振り回されている。特に放課後のアリーナでは模擬戦回数が増加した。

「それっ！逃がさないわよっ！！」

何故か鈴は一光にご執心の様で一夏からすればようやく二対一の状況になったという物。しかし、方や訓練機《打鉄》ウチガネの箒とセシリアを相手にする一夏は回避に集中しなければならぬ。

「一夏！相手入れ替えっ」

一光が叫ぶ、現在は一夏と一光がコンビで箒・セシリア・鈴の三人を相手に奮戦している。詩織はと言えば数学の予習をしたいらしい、何とも真面目である。

「無茶言っな！」

一夏の即答、今現在、一光は地上で一夏は空中。箒達に手加減無用で迫られて逃げの一手の一夏である。

「観念しろ！一夏あ！！」

箒の振り上げた近接ブレードが一夏を捕らえようとした瞬間、箒の撃墜を知らせるアラームが鳴り響く。

「おいおいおい！ハドロン砲威力高すぎだろ！！！！」

先刻送られてきたバリエーション装備で現在は《ランスロット・コンクエスター》の一光、とっさに筈を狙撃したのだ。正式名称はハドロンプラスター、砲身にヴァリスを連結させて放つ《ランスロット》唯一の光学兵器で未だに試作段階。

余談ではあるがキリエの話では量産型予定の簡易版・ランスロットに搭載するらしい。ああ、恐ろしや。

「よそ見るなんて余裕ね!!」

「ぐはっ!?!」

見事に鈴の双天月牙が一光を捉えて、シールドエネルギーは一撃でスツカラカんだ。危険域も良い所である。

「まだ私をお忘れでなくて!」

「のわっ!?!」

一夏を狙撃しながら、隙をついてセシリアがビットを仕向けてきた。危うく撃墜される所である。

「それっ! 衝撃砲!!」

「一夏! 零落白夜は使えんのか!?!」

バンバン衝撃砲を撃ち、二人を追い込む鈴とセシリア。ボーイズは逃げの一手だ。

きつと某白馬艦長ならもつと弾幕はれッて言っな。弾幕薄いよ！何やってんの！！みたいなの？

「後一発だけならな！」

「よし！行け！！」

「すまん、エネルギー切れた」

「ハア！！！！？」

そう言つて一夏は離脱する。しかしこの勝負、賭け勝負であるから負けられん！

「ほれ、これとこれと後これも！」

上機嫌で鈴は品を指定しまくる、一夏は渋々ボタンを押すと財布を取り出す。

学食の癖に一月に一度、高級デザートを出すのだ。しかも有料で！幕とセシリアは一光が払った。

嗚呼、諭吉が飛んでいくよ。

「何を泣きそうな顔をしている？」

財布の惨状に嘆いているとドイツ代表候補生ことラウラ・ボーデリツヒがと尋ねてきた。

ついこの間まで一夏を目の敵にしていたクロウサギ部隊の隊長で、一夏の部屋に忍び込む悪癖を持つ。

いつもしているガチの黒眼帯が目印の少女は答えを待っている

「月一のデザート代を払わされたんだよ、みんな意気込んでたからね」

同時に、後ろからシャルロット・デュノアが答えを代弁。

ラウラは一光を見るなり鼻を鳴らした。

「ふっ、その体たらくでは今の私でも楽勝だな」

「おいコラ、チビウサギ。お前に負けるほど金銭面は押しとらんわ」

「ほう、ならば試すか？」

因みに、ラウラとシャルロットが転校してきて約二ヶ月。初夏に差し掛かった今日日六月。

学年別トーナメントで勝てばラウラが一夏&シャルロットと戦わずだった一光は、不祥事の発生で戦わずじまだった。

ラウラ的には一夏の次にぶっ潰す対象が一光らしく何かと挑発す

る。

「いや、只でさえ今月ピンチだから。」

「ほう、逃げるのか？」

「おーい、一夏。ラウラがな……」

「そ、それ以上喋れば殺す！」

これは比喻とかではなく本当に殺意満々だ、コンバットナイフが喉仏に当たっている。変に動こうものならもれなく掻き斬られよう。

「ストップストップ！悪かったからその物騒なもんしまえ！」

「フンッ！このくらいどうにも出来んのか？情け無い奴だ」

「俺は鉄人じゃねえんだ！」

ラウラが勝ち誇った笑みで見下すがそこは態度であり、身長的意味ではない。

「カズも悪いんだよ、弱みに付け込もうとするから」

「その意味ではシャルロットも同じだったなぐばはあ！？」

いきなり問答無用でパイルバンカーを叩き込んできたシャル、今日日乙女は恐ろしい。

「ラウラ、カズがデザート奢ってくれるそうだよ」

「そうか、なら頂くとしよう」

「待て！俺はそんな事言つてな・・・」

今度は、A I C、停止結界である。

しまった！動けねえよ、あの財布返して！！

シャルがそそくさと拝借したマイ財布から住民を拉致していく。

今日日の出費は多大だ。

「寝るな！馬鹿者」

有り難き出席簿アタックにいつもなら回避する一光が直撃した、しかも顔面。

うわぁ、めりこんでるし・・・千冬姉は手加減がねえな。

一夏は密かにそう思ったが一光はびくりとも反応しなかった。

「山田先生、霊柩車を手配して下さい。死体を置いておく訳には行きません」

「生きてます、生きてますけど……寝てもないしちょっとネガティブになって鬱になって……」

千冬に答えると一光は授業に戻るが眼には光が宿っていない。死んでいる、間違いなく死んでいる！と一夏が授業を終えた時、話しかけると書いていたノートには授業内容ではなく節約術が所狭しと書きだされていた。

「何書いてんだよ……」

「やあ一夏。今ちよつと財布がね……」

「そうか、分かるぞ。理不尽な出費で苦しむ気持ちは……」

ガシツ！とスポーツ根性マンガよろしく一夏は一光の肩を掴む。しかしながら死体の熱は冷める一方で、発熱される気配は皆無だ。

「このままだとさあ、どう足掻いても足掻いても計算してみても三日くらいで底つくんだよねえ……この恨みは貼らすべきかな？ 晴らすべきだよな？ 今日くらい暴徒の不動君になってもいいよねええええ！？」

「そ、そうだな……取り合えず次は実技だし、行こうぜ？」

一夏は思った。

一光を怒らせないようにしよう、ヤバい！ 怖い……！

「何よ、黒いオーラ発して!？」

珍しい事に一光の変化に気付いたのは鈴だった。第二アリーナに入るや否や不敵な笑みを浮かべている一光に今回の授業の本命であるクラス対抗模擬マツチに危機を感じたらしい。何せ始まりは鈴に負けた事からだし。

「いや、気にするな。最初っから全力で出し惜しみなしだ。それだけだ」

「うーん、カズが壊れているようだけど、一夏。心当たりない？」

「それをお前が言うか？シャル・・・」

「不動君って一気に数万単位お金が飛んでいくとああなるらしいよ？」

「粕谷、その情報はどこから？」

「キリエさんが教えてくれたの。でもデザートなんて男子が興味あるとは思えないけどなあ」

詩織は昨日のデザート争奪戦を知らない、居ればきつと一光の対象になっていたことだろう。

「それでは好きなペアを組んでください。あ、専用機持ちの方は絶対にバラけてくださいね！」

最後に山田先生が強く強調した。

自衛隊のレーダーは最新の物を使用し、毎年アップデートは欠かさない。

今のスペックなら他国からミサイル砲撃を寸分狂わずに発射と同時に探知できるだろう、そんなハイテクレーダーが問題の敵機を捉え、IS部隊よりカスタムアウトされた《打鉄》が二機待ち構えていた。

『不動一等空佐、敵は未確認、全世界、どこの国にも配備されていないタイプです。恐らく、亡国企業テログループの奪取した試験機かと』

国際指名手配されているテログループ、亡国企業が奪取を繰り返していた事実は明るみされていない。そんな奴らが席に牙をむいてきたと言う事はやはり？

キリエは部下に下がらせ、自身に合わせたカスタムIS《雨籠》の近接ブレードを構えた。ランスロット並みのスピードで迫る敵にアプローチは一度限界だろう。

「各員は取り逃がした際に相手の向かう特定を急いで、もうすぐ接敵^{ゲイジ}します。」

指示を出し、息を整える。迫る敵に対し、こちらは一太刀のチャンスしかない。

「速過ぎる……！」

部下が臨戦態勢に入るより早く、敵は接敵していた。ビームクロウが獲物を弾き、同時にスラスターを破壊している。

「救護班を早く！それと奴の向かう先を割出して！」

キリエは次いで指示を出す。次いで三機の黒いISを捉えた。それは一夏やセシリアが撃破したとされているIS学園を強襲した物と同型機。

「授業は中止だ！早急に非難しろ！」

千冬の怒号がアリーナに響く。しかし、一步早く敵機が突入してきた。

模擬戦用コートのご真ん中に落ちた黒いアーマーが特徴的なISはブラックデビル生徒を一望するとビームガトリングを展開し、それを放った。

「させるかよっ！」

一夏が同時に狙われた生徒を拾うと一光はヴァリスで牽制し、一夏はビットに急ぐ。それを見た千冬が指示を飛ばす。

「専用機持ちは教師部隊が到着するまで対応！いいな！？」

「勿論！」「分かっていますわ！」「了解しました！」

三人が愛機を展開し、飛び出す。山田先生も避難する生徒の援護に回っている。しかし、《ブラックデビル》は執拗に一光に格闘戦を仕掛けていく。

「チッ！」

舌打ちと共にスラッシュハーケンを放ち、MVSを展開。《ブラックデビル》が展開した巨大なランスを捌く。

捌いたと同時に隔壁へ撃ち込んだスラッシュハーケンを巻き、追撃を避けると同時にハドロンプラスターにヴァリスを連結。宙返りの容量で狙いを定めるがそこにラウラがプラズマ刃でブラックデビルに斬り掛かり、邪魔となる。

「!?!」

シールドエネルギーが削られ、ISアーマーは激しく損傷する。フライトユニットに装備していたハドロンブラスターは使い物にならない。パージしてヴァリスを回収し、一光は背後に現れた黒いIS三機から離脱を図る。

「残念、こっちは悪手だ・・・」

ラウラを相手にしながら《ブラックデビル》は腰部の多目的ポットを開いた。

「なっ!?!」

ラウラが敵の狙いを悟ったときは遅かった。

砲口は未だに避難を終えていない生徒を狙っている。

対応には一夏とシャル、それと詩織が当たっているが、明らかに手数差があり過ぎる。刀で落とせるミサイルの数なんてたかが知れる。鈴は黒色の無人機ゴレムを相手に奮戦している。とれもじゃないがフォロに回れない。

「さあ、どうする?」

ミサイルはクラスメイトに到達する前に連鎖爆発を起こした。近くにいた鈴が血相を変えて黒煙から落ちたISに向かう。

「バカ!何やってんのよっ」

鈴は叱咤する。いつもなら強く、一夏と共に注目の的である一光が何とか立ち上がる。

「煩い・・・それよりも落とせたんだろっな？」

鈴に尋ねる一光はMVSを取るとヴァリスを構えた。三機中・一機は先に撃破できてなれば厳しい戦いになる、今でも十分厳しいが、クラスメイト防衛に当たる一夏とシャル、詩織が加われば話は変わる。

「と、当然よ！」

鈴が双天月牙を構え、答えた。

クラスメイトの避難が終えて、一夏達はやっと戦闘に参加できる。しかし、状態は一刻一刻悪くなっていた。

先陣を切ったラウラは《ブラックデビル》と互角に渡り合うが《ゴレム》の挟撃を受けてじりじりとシールドエネルギーを削られ、今では鈴、一光程ではにしろISアーマーは損傷している。ランクで言えば小破と言う所だ。

一夏が雪片二型を振りかぶり、苦戦するラウラに加勢する。同時に《ランスロット・エアキャバルリー》を駆る一光と鈴、セシリアと詩織がラウラを庇うように援護する。

『教師部隊が配置についた、セクションのロックを一時的に解除する。』

その通信の意味が理解できない、千冬の意図は分る。無人機は撃破ゴレムまで至らなくても大破まで追いこんだ。そして残るは自分たち専用機持ちだけ、ここで離脱すれば教師部隊が流れ込み、一気に鎮圧も可能あるうが……。

『今だ！全員最大戦速で離脱しろ！！』

ハイパーセンサーを通し、背後のビットのセクションゲートが開く。同時にラウラから離脱を始める。しかし、言わずとも《ブラックデビル》は腕部ロケットランチャーを一夏に向けた。離脱していないのは一夏を除けば、最高速を誇る一光だけだ。そして敵の狙いは一夏だ。一光の様に男性用ISのテストヒッターなどあくまで目にも留めない、純粹にISを動かせる男子を狙った一撃を一光がブレイズ・ルミナスで防ぐ。

「不動！何をしている！？」

ラウラの声が響く、女子特有の高い声音に続く様に皆が次々と叫ぶ。

「あのバカ！」

「おいつ！鈴！！？」

一夏が到着し、閉じ始めた扉を掻い潜って鈴がアリーナに戻る。同時に扉は閉まり、一夏は思いつき扉を殴る。ゴンっ！と鈍い音が聞こえた。

「千冬姉！ロック解除してくれ！」

「出来るか馬鹿もの！」

モニター内で鈴が一光に加勢する、それでも劣勢に他ならない。衝撃砲のサイトを合わせるより先にミサイルがばら撒かれ、それが鈴に向かう。一光がそれを防ぎに回る、鈴が不意打ちの衝撃砲を放つも当たりはしない。

「なんでだよ！？このままだと鈴も不動も死んじゃまうぞ！！」

一夏の抗議にモニター通信に割り込む影があった。新たに開いたウインドには見た事のある顔がある。

『なら、仕方ないわね……』

プライベート通信が入ったのは何とか《ブラックデビル》のランスを捌いている最中だった。応じるにも距離を取りつつ、ヴァリスで牽制しながらハイパーセンサーの補助を得て目は獲物を追う。

『朗報よ、制限解除を許可します』

それはキリエの声だった。そして制限解除、つまりはこのフライトユニットを切り離し、本来の状態で戦うことを意味している。願ってもないチャンスに一光の口元はつり上がった。

底をついているシールドエネルギーなど気にしなくてもいい、何故なら当たらなければ問題は無い。鈴がいるが鈴に注意が向いた瞬間、一光は作業を開始した。

「ああ！鬱陶しい！！」

獲物を犠牲に鈴は衝撃砲・龍砲を直撃させた。狙いを変えた刹那にワイヤー、多目的ミサイルの雨が降り、近接タイプの鈴にとっては相性が悪いことこの上ない。

やったか？そんな事を口にする暇もなく、《ゴーレム》は損傷した右腕を？ぐと肉迫し、それを棍棒の様に振り回す。

「もう何なのよ！前と違って今のは防御型！？」

不意に顎に衝撃が入った。操縦者保護システムが働いたおかげで怪我らしい怪我はしていないが衝撃は殺し切れていない。プロボクサーのアッパーをもろに貰った程の衝撃が鈴の襲い、一瞬だけ意識を奪う。黒い悪魔の拳が、鈴を捉えようとした時。

「！？」

《ブラックデビル》の両腕部が破壊された、ビームや光学兵器の類による攻撃。それを行った人物はアリーナに一人しかいない。さらに不幸な事と言えば、《甲龍》のエネルギーが切れた事だ。ISアーマーが消えた鈴は簡単に吹っ飛ばされてしまう。

「よう、無事か？」

それを空中で受け止めたのは右腕装甲と上半身を消し、足・背だけを部分展開した一光だった。

「なっ！お、降ろしなさいよ！！」

所謂御姫様だつこ状態の鈴は顔を真っ赤にして暴れだす。大丈夫そつだなと呟いた一光は攻撃に移る《ブラックデビル》を一瞥するとすぐにアクションを起こした。

ビットのモニターからではいきなり多目的ポットが爆ぜたように見えた。

「速い！」

シャルが驚く。ラウラとシャルは本領を發揮した一光を知らないからだ。

「あの速度であの正確さ、並みの訓練では身につかん！」

「さて、ここからアイツの凄い所だぜ・・・」

一夏は少し悔しかった。強くなりなりたい、そう思わずにはいられないほど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1472n/>

IS《インフィニットストラトス》outerstory

2011年5月31日15時54分発行